2023年9月3日 礼拝メッセージ

聖書:列王記第二11章1～12節
説教:主の宮に身を隠す王す

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ってから今日の箇所を見ていきます。いまからおよそ二千八百年前、イゼベルはバアルの神々を北イスラエルに持ち込み、人々にこれを拝むようにと強制し、邪魔になった主の預言者たちを殺したばかりでなく、正義をねじ曲げ、嘘偽りを語って、無罪の者を有罪として殺し、欲しいものを手に入れる。そんな世の中に変えてしまいます。これをご覧になっていた主は、エフーを送り、北王国の王であったヨラムと、その母であったイゼベルを倒し、その一族を滅ぼしていきます。それと同時に国の中からバアルを礼拝する者たちを一掃し、バアルの神殿を徹底的に破壊していく。そのとき、たまたま北王国を訪れていたアハズヤ王もエフーの手で殺された。それが前回までのあらすじです。

今日は、舞台が北イスラエルから南ユダ王国に移ります。アハズヤの母アタルヤとは、イゼベルの娘のことです。今日は二つのことを考えていきます。一つ目。皆さんも疑問に思ったはずですが、どうしてアタルヤは王の一族全員、つまり自分の孫たちを殺したのか。二つ目の疑問。この後で、祭司エホヤダという人が出てきますが、なぜエホヤダはヨアシュをかくまっていったのか。この二つについて考えていきます。

１　アタルヤ

１）一族全員を滅ぼした

1節を読みます。「アハズヤの母アタルヤは、自分の子が死んだと知ると、ただちに王の一族全員を滅ぼした。」北イスラエルのヨラム王とその妻イゼベルの間に生まれた娘で、南王国に嫁いできて息子のアハズヤを生み、王とした。ところが今も言いましたように、アハズヤが自分の叔父に当たるヨラムが戦争でけがをしたというのでお見舞いに駆けつけた時、エフーの手で殺されてしまう。その知らせを母親のアタルヤが聞く。さぞかし息子の死を悲しんで喪に服するのかと思ったら、男の孫を全員殺してしまう。

２）ヨアシュだけが逃れる

ところがそこから逃げ延びた人たちがいた。2節を読みます。「しかし、ヨラム王の娘で、アハズヤの姉妹のエホシェバは、殺される王の子たちの中からアハズヤの子ヨアシュをこっそり連れ出し、寝具をしまう小部屋にその子とその乳母を入れた。人々が彼をアタルヤから隠したので、彼は殺されなかった。」

ここに出て来るエホシェバはヨラム王の娘とありますが、アタルヤの娘でもある。そのエホシェバは自分の母親が恐ろしいことを行おうとしている時、とっさの判断でアハズヤの子どものヨアシュを隠し、なんとか助け出した。このときヨアシュはまだ一歳です。見つかればヨアシュも隠した者たちも殺される。あまりにもひどい話しではないでしょうか。なぜアタルヤはこんなことをしようとしたのか。それが一つ目の疑問です。

２　祭司エホヤダ

１）ヨアシュをかくまう

4節を読みます。「七年目に、エホヤダは人を遣わして、カリ人と近衛兵それぞれの百人隊の長たちを主の宮の自分のもとに来させ、彼らと契約を結んで主の宮で彼らに誓いを立てさせ、彼らに王の子を見せた。」

エホヤダは祭司で、歴代誌第二を読むとエホシェバの夫であったと書かれています。ということは、エホエシェバがヨアシュを主の宮にかくまったのは、自分の夫がそこで祭司として働いていていて、都合がよかったからです。とは言えエホヤダにしてみれば、ヨアシュをかくまえば自分の身にも危険が及びます。どうしてそこまでしてヨアシュをかくまったのか。これが二つ目の疑問です。

２）厳重な警備

やがて月日が経ち、ヨアシュが大きくなっていくと、エホヤダはヨアシュの教育にも関わり、主の戒めと律法を教えていきます。そして七年目のことです。おそらく数百人規模の近衛兵を集め、契約を交わして、主の宮の警備に当たらせる。それがどれだけ厳重なものであったのかは、11節に書かれています。「近衛兵たちはそれぞれ武器を手にして、神殿の右側から神殿の左側まで、祭壇と神殿に向かって王の周りに立った。」武器を手にした近衛兵が王を真ん中にして神殿の右から左にずらっと並んで取り囲むというのですから、非常に厳重な警戒です。もちろん、血眼になって捜しているア

タルヤの手から守るためということですが、なぜそこまでするのか。これには理由がありそうです。

３　ダビデの子孫

１）主の約束

そのことはアタルヤが一族を滅ぼそうとしたこととと関係しています。ヒントは並行箇所である歴代誌第二23章3節です。これは祭司エホヤダが百人隊長たちや神殿の務めにあたるレビ人たちを前にしてのことばです。「全会衆は神の宮で王と契約を結んだ。エホヤダは彼らに言った。『見よ。主がダビデの子孫について約束されたとおり、王の子が王となる。』」

主がダビデの子孫についてなされた約束とは、サムエル記第二7章12，13節に記されているいわゆるダビデ契約と呼ばれるものです。「 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

エホヤダがヨアシュをかくまう理由が、すべてこのことばに集約されています。主がダビデの子孫について約束されたみことば、ダビデの血筋の者が必ず王位を継がなければならない。そのことを非常に大切なことと考えている。今は、女王アタルヤが国を治めています。でもアタルヤはダビデの家系ではありません。ただ一人生き残ったヨアシュだけがダビデの家系にるらなっていて王の地位を受け継ぐ資格がある。主の契約のことを考えるなら、絶対にヨアシュを守り、ユダ王国の王とならなければなりません。

このことは、アタルヤが冷酷に一族を滅ぼそうとした動機にもそのままつながっていきます。アタルヤは、両親がしていたようにバアルを礼拝しています。そのバアルを礼拝していたために母イゼベルと一族がエフーの手で滅ぼされた。そのエフーは主を信じています。そうしたらどうなるでしょう。当然、アタルヤは家族を殺したエフーを憎むと同時に、エフーが信じる神をも憎んだはずです。自分の娘婿である祭司エホヤダからは、その主という方がダビデを通してどのような契約を結んでくださったのかを聞いていたでしょうし、自分の孫たちがダビデの血を受け継ぐ資格があることも教えられていた。バアルを礼拝しながら、自分の一族が主の契約と深く関わっているというのですから、アタルヤの立場は非常に微妙です。もちろん嫁いできた時は、そんなことはあまり気にも留めていなくて、ずっとあいまいなままにしてきた。それでなんとかなった。ところが事態がこうなってくると、どっちつかずとはいかなくなる。白黒はっきりつけなければならない。憎いエフーに復讐するためには、エフーが信じているものをズタズタに切り裂くのが一番です。それでダビデの血筋を引く孫たちを亡き者にし、王位継承者を全員抹殺する。そうすればエフーを手にかけることなく、エフーを倒すことができる。聞いているでけで恐ろしい計画ですが、アタルヤは平気でそういうことをした。

２）このときのために

そんな残酷な計画が行われていたとき、エホシェバは賢明にも母親の手からヨアシュをかくまい、夫とともにいのちをかけます。

ここでひとことだけ付け加えておきます。ある方はこう考えるかも知れない。もしあのときエホシェバとエホヤダが一生懸命動かなかったら、ダビデと交わした契約は反古になっていた。二人がいのちをかけてがんばってくれたために神の計画が無事に前に進んだ。そのように見えます。でもこれはこう考えるべきでしょう。神のご計画は人の力を借りなければ前に進まない、そんなあやふやなものなのでしょうか。そんなことはない。どんなに人の罪が大きく、どんなにこの地上に悪が満ちていても、主の約束は必ず成就される。二人ががんばったためというのではありません。

ではどう考えるのか。神は人に支えてもらわなければ何もできない方ではありません。むしろその反対です。神が人を神のご計画の中に招いていくださり、いつの間にかそこで用いられていく。

エホシェバだってヨアシュを隠そうとしたのは、神の計画がどうのというよりも、かわいそうだと思っただけだったかもしれない。祭司エホヤダも、妻からヨアシュのことを打ち明けられた時は、「困った、どうしよう」と不安に駆られなかったと言ったら嘘になる。やっぱり「どうしようか」と悩んだでしょう。でも、エホヤダは神の約束を信じています。それを思い起こした時、自分が何かをしなければ、ではなく、ああそうか、自分が主の宮の祭司となったのは、実はこの時のためであったかもしれないと気がついた。いま主が自分を召しているのだと悟り、なすべきことをしていく。それがエホヤダの信仰でした。

３）救いを信じる

心配性の方は考えるでしょう。もしかして途中で見つかって全員殺されるかも知れない。そうなっ

たら終わりではないか。そうなるかもしれません。でも、そこで主の約束が頓挫してしまうというふうには考えません。どんなことがあろうとも、主の救いの約束が確かであることを信じます。たとえアタルヤが神の計画を台無しにするようなことをしたとしても、主の計画は絶対に揺るがない。そのことをエホヤダは信じます。信じつつ、自分のできることを精一杯していく。

　エホヤダのように大きなことではないかもしれませんが、私たちひとり一人にも主のご計画はやはりあると思います。私にはとてもそんな大それたことはできないと尻込みするかも知れない。でも今置かれているところ、今のあなたがしてく。私たちの歩みのうちに主が伴ってくださり、主のご計画が成し遂げられるために、私たちは用いられていく。もしかしてこのときのためでしょうか。そんな選択に迫られたとしても、大丈夫。主は私たちを失望させる方ではない。むしろ消え去ることのない永遠の希望を与えようとされています。